

拾い読みは読書力を低下させる

幼児たちが、記憶を頼りにして、漢字をたどりながら本を読もうとしても、かなはたどらせないほうがよろしい。

かなは表音文字であるから、幼児たちは、どうしても「あ、る、ひ、お、ば、あ、さ、ん、が……」というように、かなを一字ずつ拾って読む、ということになります。

戦後の教育では、“拾い読みをさせないように”ということで、「うし」「うま」というように、一語をまとめて教え、初めから「う、し」「う、ま」と分解して学習させないようにしましたが、これも成功しませんでした。

私は、昭和二十八年から五年間、石井方式と文部省の従来の学習法との比較実験をやりましたが、最初から漢字で学習する石井方式で育った子供と、最初はかなから学習する学習法で育った子供とでは、読書の速度が本質的に違うことがわかりました。

五、六歳児の読書の速度というものが基礎になって、その後の読書の速度が規定されるのです。初め遅い者は、大きくなって遅く、初め速い者は、大きくなるにつれてますます速くなるのです。

石井方式で育った子供は、小学校の三、四年生になれば、私たちよ

り速く読書し、しかも正確に内容をつかみます。私など、かなから学習したものですから、情けないことに、子供に負けてしまいます。

読書は、ある程度スピードがないと、文意がつかみにくい、と前に述べました。それはなぜでしょうか。

それは、日本語の性格として、「文章を、初めから終わりまで、ひと息に速く読み通さないと、文意をつかむことがむずかしい。」という性格があるのです。

たとえば、「昨日、私は、東京駅へ、友人の見送りに、行きました。」という文を例に考えてみます。

「昨日」「私は」「東京駅へ」「見送りに」という言葉は、それぞれには全くつながりのない言葉であって、これだけ聞いたのでは、まことに支離滅裂という感じで、文意もつかみようがありません。これは、

昨日、行きました。

私は、行きました。

東京駅へ、行きました。

見送りに、行きました。

という関係にあるのですから、「昨日」から「行きました」まで、ひと息

に読み通さないと、統一がつかないのです。

かなばかりの文章は、スピードが出ませんから、読み終わっても、統一がつかず、文意がつかめないことが少なくありません。電報文など、短くても、何回か読み返すことがよくあります。

小学校の算数で、文章題(応用問題)の成績の悪いのも、原因はここにあることがわかりました。石井方式で教育された子供は、文章題が得意であるというのがその証拠の一つです。

また、「家庭で文章題をやらせるとできるが、なぜ学校ではできないのだろう。」という母親の相談をよく聞きますが、これは、文章を母親が読んでやって解かせるから、文意がつかめるのであって、学校では、自分で読むので、スピードがなくて文意がつかめず、したがって式を立てることができないのです。

読書の際のスピードは、単にスピードと考えるだけでなく、速く読みたいと思います。つまり、最初の読書を、拾い読みさせないような配慮が絶対に必要だ、ということをお忘れなく、速く読みたいと思います。



かなの文章題では文意がつかめず式がたてられない